

道教類書と教理體系

麥谷邦夫
(京都大學)

中國における類書の歴史は、先秦時代の『呂氏春秋』や前漢の『淮南子』にまで遡ることが可能である。しかし、『皇覽』をはじめとする本格的類書が編纂されるのは、魏晉南北朝、とりわけ五世紀以降のことである。この時代は、學術・文化のうえでは佛教の流入定着と道教の成立という大きなできごとがあった。あらゆる書物からの網羅的抄録を分類整理して、歴大な知識を簡便に提供することを目的とした類書の内容にも、このような學術・文化の新しい潮流が反映されることになる。類書の性格がこのようなものである以上、その構成には當然のことながら編纂者の世界観が反映されることになる。とりわけ、佛教なり道教なりに特化した類書であれば、その教理體系への理解が明確な形で類書の構成に反映されていると考えられる。

佛教に特化した最初の類書が編纂されるのは、南朝梁の武帝の時代であった。彼は『華林遍略』の編纂を命ずるとともに、『衆經要抄』次いで現存する最古の佛教類書である『經律異相』の編纂を命じた。こうした佛教類書の編纂には、經典の結集と目録の編纂という前提条件が必須であったと考えられている。

一方、ほぼ時を同じくして、北朝においても周の武帝の命によって、最初の道教類書ともいえるべき『無上祕要』が編纂された。佛教類書の編纂同様、『無上祕要』の編纂に先立っては、道典の結集と目録の編纂とが前提条件となっていたと考えられる。北周では通道觀という國立の宗教研究所に相當するものが設置されてその役割を擔ったと考えられるが、その活動の實態はかならずしも明かではない。本論では、『無上祕要』や隋唐時代の道教類書の分析を通じて、そこに反映された道教教理體系の特徴や類書という形態の持つ役割を検討する。

麥谷邦夫 MUGITANI Kunio

1948年生

京都大學人文科學研究所教授

主要著作 『周氏冥通記研究(譯注篇)』 「穀食忌避の思想—辟穀の傳統をめぐって」 〈南北朝隋初唐道教教義學管窺—以《道教義樞》爲線索〉 『大洞真經三十九章』をめぐって 「陶弘景の醫藥學と道教」 ほか多数